

特集 「免疫療法の進歩と課題」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
免疫学

松 田 修



微生物との共存と感染を通じて進化した免疫系は、特異性、記憶、自己不応答性というたぐいまれなる特性を獲得し得るので、免疫応答の人為的な制御は通常の薬剤や手術といった治療手段だけでは不可能な病気の治療技術として活用できるものと期待されてきた。天然痘ワクチンは、その起源を Jenner より以前、少なくとも 18 世紀初頭まで辿ることができ、悪性腫瘍の免疫療法は 19 世紀から試行されているが、それらはもちろん免疫学の精確な知識に基づいたものでなく、先人たちの尋常ならざる洞察力と実行力によって着想され敢行されたと言えるであろう。免疫学の発展にしたがって、免疫グロブリン、BRM、サイトカイン、ペプチド抗原ワクチン、樹状細胞ワクチン等が次々と応用されるようになってきた。その後抗 TNF- α 療法は関節リウマチの治療を変えた。そして免疫チェックポイント阻害剤の登場が、これまで効果が不確かだと見なされていた悪性腫瘍の分野においても、免疫療法の実効性と潜在的な威力を証明することとなった。そこで今、免疫療法についてあらためて俯瞰することは、将来のさらなる発展を見据えて極めて意義深いことであると考え

本特集では、まず悪性腫瘍の免疫療法の基礎についてのレビューを供覧することとした。免疫チェックポイント阻害剤が有効ではない症例に対して、既存の免疫療法（従来は有効性が認められなかったものも含めて）が、免疫チェックポイント阻害剤との併用で有効となる可能性

が考えられるので、既存の免疫療法全般と現在進められている免疫療法について知識を整理することを目的とした。

次に、消化器癌に対する免疫療法について、消化器内科学の石川先生、内藤先生と伊藤先生がご寄稿くださった、胃癌と大腸癌に対する免疫療法として、石川先生らが独自に開発された抗体薬と NK 細胞療法との併用の話題を含めて、詳しい解説を書かれた。

また脳神経外科学の橋本先生は、脳腫瘍に対する免疫療法と題した総説をご寄稿された。とくにグリオーマに対する免疫療法として、橋本先生らが行ってこられた WT1 ペプチドワクチンについて、その原理と治療成績を含めて解説して下さっている。

呼吸器内科学の内野先生と高山先生は、肺癌に対する免疫チェックポイント阻害療法の原理、効果と有害事象について、内野先生らの臨床経験を交えた詳細な総説をご寄稿された。

最後に、免疫内科学の藤岡先生と川人先生は、膠原病疾患とアレルギーにおける免疫療法と題した総説をご寄稿された。サイトカイン、T 細胞、B 細胞等に対する抗体を用いた療法やアレルギー免疫療法に関する最新の知見を分かりやすく解説して下さっている。

本学においては、故岸田綱太郎名誉教授のインターフェロン療法に代表される、先駆的で目覚ましい研究が数々行われてきた。本特集が本学の免疫療法の臨床と研究のさらなる発展に貢献できることを期待します。